〔ふるさとの宝No.18.〕

宇根路と御茶屋成り

宇根路とは今はめったに人も通らない。北は中国牧場より旧下阿村と旧尾白村の境をなす山の尾根又はそれに副う山道であり、南は阿位八幡宮の近くの安部善昭氏宅右側に出るまでの約二キロメートルの道である。歴史ある重要な往還であった。北より紹介すると堅田十字路より尾白方面に行く半約一キロメートルの所に中国牧場の立看板がある。ここが宇根路の入口である。中国牧場への舗装の道約三〇〇メートルはそのまま中国牧場構内に入るが、旧往還は門の手前より左へ進んでいく。草におおわれているが確かに旧往還である事が認められる。しばらくして中国牧場の敷地として埋め立てられているが又旧道が姿をあらわし谷間を登って行く部分が、採砂場のため約二〇〇メートルが掘削され姿が失われている。尾根に上ってしまうと坦々とした道で南西方向に進んでいく。巾は二～三メートル位、「出雲国十誌絵図（文政四年一八二一）にはこの部分に「宇根路」と記されている。

この名称の由来は、近くに上阿井櫻井家が経営された「宇根たたら」があり、享保二十年（一七三五）操業以来、明治四十二年（一九〇九）まで約二〇〇年間経営した櫻井家中核の施設で、この間砂鉄や木炭あるいは大鍛冶場（奥内谷・内谷<檀井家本宅前>木地谷）へのたたら製品の輸送（馬の背による駄送）で毎日繁く人と馬の往来があったことによるものであろう。

さて、この長さ一キロメートルほどの尾根路は多くが笹におおわれているが、その跡はしっかりと残って松林の中を続いている。尾根の端の高地が狼山で高さ三九四メートルであるが、極めて眺望のよい所で東には高尾の伊賀平山（六七九メートル）南には猿政山（一二六八メートル）鯛ノ巣山は勿論、大上の田圃も又はっきりと・・西方はるかに三瓶も望まれる。（現在は眺望がきかない）この狼山は陸地測量の際の三角点で石柱が立っている。その昔この周辺が十メートル平方ほどの広場があって御茶屋成りと呼んでいた。

櫻井家の文書によると、松江藩第七代藩主治郷（不昧）公が享和三年（一八〇三）同家に御成り（訪問）になられ、以来十代の定安公に至るまで六回の御成りがなされている。いずれも旧歴の九月から十月にかけての紅葉の季節で、各藩主もこの宇根路を通られ、御駕籠立場（駕籠からおりて外に出られる場）として休憩され、更にここでは先程招介した周囲の景観を愛でながら野点（抹茶）を楽しまれた所である。

道は狼山のふもとを南より西にまわってゆるやかに下っていく。山のふもとに一里塚（松）があったことが、さきの絵図に描かれているが痕跡はない。その近くに高圧送電線の鉄塔が今は代わりに立っている。道は更にゆるやかに下り元の下阿井小学校跡の西のところの左側の道を下り町道三沢阿井線と接する。

この宇根路は、あるいは古代の「出雲国風土記」時代の通路であったかも知れない。古代・中世・近世の重要な往還であり歴史の道である。

現存、この道を訪ねることは困難であるが、記憶に残したい貴重な街道である。